

更級への旅

歴史文化から産業、地形まで旧更級村の特色を詠み込んだ歌の数々を紹介したいと思います。いずれも終戦直後からしばらくの間で作られたものです。

▽村づくりへの意気込み

まずは更級村の青年団歌です。羽尾の郷土史家の塚田哲男さんに歌詞の書かれた紙(写真上)を見せていただきました。活版印刷で山と渡しの間に詞をほさんでいます。冠着山と千曲川をモチーフにしたと思われる。塚田さんによると、詞をつくったのは戦後の新しい

学制で誕生した更級中学校の先生、今村寛さんで、その後歌人の結社の一つである「コスモス」の同人となった方だそうです。

歌詞には敗戦を機に若者が新しい村づくりの担い手になるんだという期待と希望が満ちています。特に四番の「古今をつなぐ里の名に負ひてぞ振るへ」は、更級小学校校歌を締めくくる四番の言葉「里の名を世に伝うべし」に匹敵するもので、更級村の自負と使命を強烈に意識させます。当時の青年団長でいらした高村元二さん(羽尾地区在住)が今村さんに作詞を依頼しました。戦後は、気持ちの吐きどころがないと生きがいが無い時代だったと高村さんはおっしゃいます。青年団の歌を若者がみんな歌うこと

更級村を詠みこんだ村歌の数々

によって一つの方向性を持って自分のこと、そして村のことに当たれるよう期待したのだと思います。そうした意気込みは「公民館報さくら」からもよくうかがえます。高村さんとその仲間が編集の中心となっており、村の新たな進路を盛んに熱く論じ、必要な情報をたくさん提供しています。青年団歌はその思いを汲み取つていると言えるでしょう。

▽生徒自ら作詞と作曲

次に旧更級中学校の「校友会歌」です。校友会は今の生徒会のことです。生徒会の歌です。この歌の存在を教えてくださいましたのは塚田克己さん(羽尾地区在住)です。塚田さん「自身が作詞したというのですが、記憶が定かでないというので、資料を探しました。」

ありました。校友会が昭和三十年度(一九五五)に編集発行した「学友」という冊子です。A5判約八十ページで、磯部地区(旧戸倉町、千曲市)にお住まいの古旗治男さんがお持ちでした。さしなの歴史史料館の小山好子さん

青年団、更級中、小唄、飴売り

更級村青年団歌

- 一、白雲たかくゆきかよう
み山の花のいろふかし
希望をはらむこの胸に
生命ぞかをれ更級の
ああ我等 我等更級青年団
- 二、清冽今も淀みなき
流れの岸の草わかし
理想をとりて同胞に
光と映せ更級の
ああ我等 我等更級青年団
- 三、風雪あらくおそふとも
と渡る月の影しるく
悲愁を越ゆる営みに
時代をおこせ更級の
ああ我等 我等更級青年団
- 四、春秋常に句ひつ
移らふ時のいやしづか
古今をつなぐ里の名に
負ひてぞ振るへ更級の
ああ我等 我等更級青年団

更級中学校校友会歌

文化の道

- 一、山川清き更級の明け行く空に昇る日を
心の光と仰ぎつつ文化の道に勤しまん
 - 二、平和の里の学びやの若人我等の真心よ
誇りと高くかざしつつ文化の道に勤しまん
- 輝く健児
- 一、冠着山の森の木の梢に朝日の射すごとく
清くゆかしき精神の輝く健児のまなざしよ
 - 二、千曲の川の急流のしぶきに夕日のさすごとく
清くゆかしき精神の輝く健児のまなざしよ

更級小唄

- 一、おらがじまんのあの月が
チヨイト出ました冠着に
空のお月様まんまるで
角もたたねば添いよかる
エーソウダヨホントダネ
- 二、おらがじまんのこのリンゴ
チヨイトとらんよすずなりだ
顔もつやつや器量よし
やがて都へおよめ入り
エーソウダヨモウジキネ
- 三、おらがじまんの湯の煙り
チヨイト八王子来てごらん
千曲へだててひとながめ
ネオンきらめく湯の町を
エーソウダヨキテゴラン
- 四、おらがじまんの更級は
チヨイト住みよいくらしよい
まゆに切花乳牛に
ほんにおかげで楽な村
エーソウダヨウレシイナ

飴売りの歌

若くもないのに若宮と隣の芝原でひとやすみ向こうの小村が仙石かいたずら子どもががき山とびよんびよん羽尾とく三島須坂じゃ飲めない代を出せおっと危ない杉の木登り峯へと登って世にも名高い猿が番場向こうに見えるは中原か夏でもとけない郡村八幡はちまん指して行く

に教えてもらい読むことができました。校友会の機関誌の創刊号で、巻頭に校友会歌として「文化の道」と「輝く健児」の二つが載っています。機関誌発刊の節目に校友会の歌をつくる企画が持ち上がり、文化の道と輝く健児という二つのタイトルで生徒たちに詞と曲を募集し、結果をお披露目したのだと思われます。文化の道の作詞者は小松正典さんです。小松さんは「学友」の中でいきさつについて「家の窓ガラスを開けるとすぐ冠着山が目に入った。よし冠着山を主にして作ってみようと思つたが、校歌と同じになってしまふ。それでも頭の中は冠着

山と千曲川の景色がいつぱい。山と川僕はそれがよいと心に決め、この山と川の間での学び舎に楽しく勉強して文化に遅れぬようにしたいと思つた」と記しています。(中学校の校歌は小学校の校歌と同じでした)

「輝く健児」の歌詞を塚田さんにお見せしたところ、塚田さんは「冠着山に朝日があたってキラキラしているように、いつも瞳を輝かせ、純粋な気持ちでいたいという思いで作つたよさな気がする。今は雑念ばかりになってしまった」と照れていらつしやいました。

応募数も書いてありました。文化の道、輝く健児にそれぞれ十八点ずつ。作曲には文化の道に四十五点、輝く健児には二十四点。作曲者についてはそれぞれの一位から佳作まで名前が書いてあります。文化の道の一位は北沢のぶさん。輝く健児の一位は市川すみ子さんです。自らの手でみんなという生徒たちの歌づくりには、終戦直後の青年団歌づくりの思いが受け継がれていたようです。

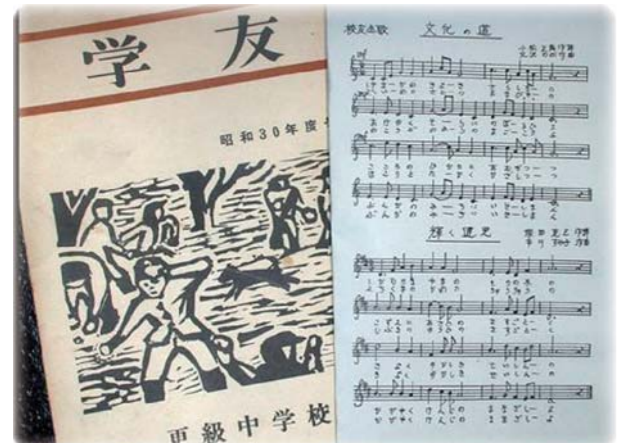
▽合併でうやむやに

三つ目は更級小唄です。更級村公民館が昭和二十九年、村民に募集し、金井幸雄さんという方が優秀作の一つに選ばれた」とシリーズ十九回で紹介したところ、ご本人からその後のいきさつを話されたお手紙をいただきました。金井さんの弟さんである金井達雄さん(仙石在住、旧更級村)が届けて下さいました。お手紙によると、金井さんがこの詞をつくつたのは更級中学校三年生だったとき。公民館から賞金五百円と記念品を受け取りました。曲を付け、振り付けも施されて更級村で広く使われるという予定でしたが、残念なことに、その後の戸倉町との合併(昭和三十年)でうやむやになつてしまつたそうです。十九回で載せられなかつた全歌詞を掲載しましたので、ご覧ください。

金井さんは小学校四、五年生ころから歌われる詩に関心があり、更級小唄が入選してからは一層作詞に引かれました。今は千曲市上徳間にお住まいで、「千曲川暮情」など故郷を題材にした詞も作り、カセットテープやCDの制作も手掛けています。こうした創作の原動力は「遠く更級村にあり、『やうしな』を想いながらいつか郷土のみなさんに歌つてもらえる歌を書きたい」という思いだそうです。

▽足でつくつた歌

もう一つ最後に、飴売り歌です。これはシリーズ二回目で紹介した松本与喜のさんが覚えていらした歌です。若宮から三島まで旧更級村の地区名をだじゃれを効かせながらすべて盛り込んでいます。この歌を覚えてくださったのは松本さんの近くにお住まいの野本洋子さんです。松本さんは「終戦後、朝鮮人の飴売りがこれを歌いながらやってきて、たくり飴などを売っていた」とおっしゃっていました。リズムカルな節がついていて、太鼓を叩いて売り歩いてきたそうです。



発行 二〇〇六年 七月二十四日
編集 さらしな堂
(代表・大谷善邦)
〒三八九・〇八一三
長野県千曲市大字若宮二一八四・六
(旧更級郡更級村)